

野々上西遺跡

2001年3月

大阪府教育委員会

はしがき

今回、発掘調査を実施いたしました野々上西遺跡は、羽曳野市野々上西5丁目に所在します。羽曳野市は、西に羽曳野丘陵、東に生駒山地がそびえ、その間を石川が北上しており、本遺跡は、羽曳野丘陵上に位置します。

周辺の遺跡を見ますと、本遺跡から南約200mの所には、7世紀の中頃に造営されたと考えられている「野中寺」が今もその面影を残しています。

「野中寺」は、昭和59、60年に発掘調査が行われ、調査で検出された伽藍が『野中寺旧伽藍』として国史跡にも指定されています。寺の南には、古代の官道である「竹内街道」が走っています。

本遺跡の東には野中寺の造営や維持に深く関わったと考えられている集落が検出された、野々上遺跡が存在します。

北には、南河内を縦断する古代の大水路である、古市大溝が存在し、羽曳野住宅建て替え工事に伴う発掘調査においては、古市大溝の一部が検出され、大溝の掘削状況などがわかつてあります。

今回の調査では、飛鳥から奈良時代の人々の生活跡が検出されました。また、調査区の北側では野中寺の寺地を画する可能性のある溝と塀などが検出されました。

この調査成果によって「野中寺」と「古市大溝」までの空白であった地域にも遺跡が広がることが、確認されたことになります。これは今後、この地域の歴史を考える上で、貴重な資料を得たと言えます。

今回の調査にあたり、ご指導およびご協力いただきました地元の皆様をはじめ、関係諸機関ならびに関係各位に深く感謝いたしますとともに、今後とも、文化財保護行政に一層のご理解とご支援のほどをよろしくお願い申し上げます。

平成13年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 小林 栄

例　　言

1. 本書は、大阪府営羽曳野南住宅建て替え工事に先立って実施した、野々上西遺跡発掘調査報告である。
2. 調査は、大阪府建築都市部住宅整備課の依頼を受け、大阪府教育委員会文化財保護課が、平成11年度は調査第1係技師　橋本高明、平成12年度は調査第2グループ技師　井西貴子を担当者として実施した。
3. 現地調査は平成11年度は9月から12年1月まで、平成12年度は5月から7月まで実施し、遺物整理事業は現地調査と平行して実施するとともに2年度分をまとめ平成13年3月に終了した。
4. 本書で用いた座標値は国土座標第VI座標系に基づいており、掲載した方位は座標北を示す。標高はT. P. で表示している。

また、土層の記載に用いた色調は、『新版標準土色帖（14版）』（農林水産省農林水産技術会議事務局　監修）1994年による。

5. 調査にあたって地区割りを実施している。調査区はF 6-6-1・J-13・14区にあたっている。報告では、報告では第I区画と第II区画を省略し第III区画から記述した。
6. 平成11年度の写真測量は、株式会社アスコに委託した。なお、撮影フィルムについては、株式会社アスコにおいて保管している。
7. 平成12年度の写真測量は、日測株式会社に委託した。なお、撮影フィルムについては、日測株式会社において保管している。
8. 本書は橋本（現：調査管理グループ）と井西が執筆し、編集は井西が行った。
9. 調査事務所では、発掘調査年度ごとに通し番号をつけている。平成11年度は99021、平成12年度は00004である。
10. 現地調査および報告書作成作業においては、地元住民の方々、住宅整備課、羽曳野市教育委員会等、多数の方々にご教示、ご協力を得た。記して感謝の意を表する。

本 文 目 次

I 経　　過.....	1
II 環　　境.....	2
III 調査成果.....	3
IV ま　　と　め.....	12
報告書抄録.....	21

I 経過(第1・2図)

① 調査に至る経過

平成2年建築部住宅建設課(現:住宅整備課)より羽曳野市野々上5丁目に所在する府営藤井寺南住宅(現:羽曳野野々上住宅)の建て替えについて照会があった。

建て替え用地内は、北部に「古市大溝」、南部に「野中寺跡」を含むことから協議の結果、周知の遺跡に含まれない中央部分について試掘調査を実施することとなった。

試掘調査の結果、第1期建て替え部分についてはすでに削平が著しく遺構、遺物は認められなかつたために「古市大溝」部分以外は、本調査の必要はないと判断された。第2期建て替え部分については、遺物包含層が確認され、新規発見の「野々上西遺跡」として建物等の構造物および埋設管部分の発掘調査を実施することとなった。なお、南端の「野中寺跡」部分については団地内の公園として利用される計画であったことから調査は実施しなかった。

(橋本)

② 調査の方法

発掘調査は、表土・盛土を重機を用いて掘削した後、包含層以下を人力により掘削した。

調査区は、住棟・貯留槽・受水槽・電気室・配管埋設部分が調査対象地である。調査は、包含層・遺構面が府営住宅建設によって損なわれる部分を対象地とした。

平成11年度調査時点で、平成12年度調査時の残土仮置き場を予定していた部分は本体工事(杭打ち工事)の遅れや、コンクリート工事が行われていたため、機械掘削および人力掘削の残土を仮置きする場所として使用する事ができなくなった。そのため、調査区の南200mにある空き地へ残土を搬出することになった。搬出のためには生活道路を通過するため、機械掘削上については短期間のこともあり、残土搬出を実施したが、人力掘削については、調査区J14-h1・2区、約200m²を残土仮置き場として残した。調査の進行にあわせて、順次人力掘削上を搬出し、J14-h1・2区については再度機械による掘削から調査を実施し、生活道路を使用することを最小限に止めるよう努めた。

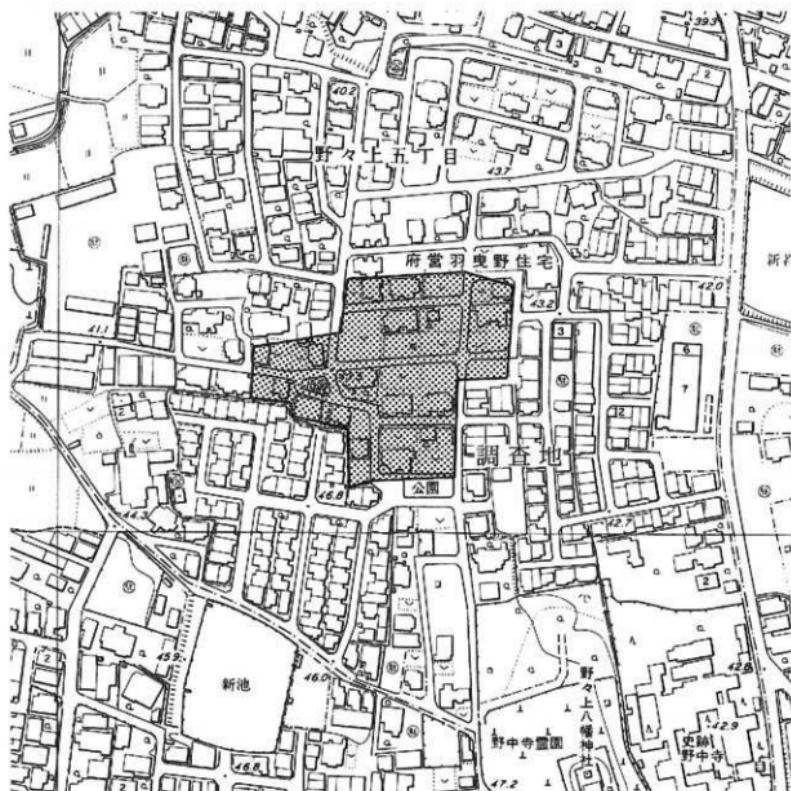
③ 地区割り(第3図)

発掘調査にあたっては、地区割りを実施した。地区割りは国土座標第VI系に基づき、1万分の1の地形図を第I区画とし、第II区画は2500分の1の地形図を使用した。第III区画は、第II区画を100m単位で区画し、第IV区画はさらに第III区画を10m単位で区画するものである。遺物の取り上げについては、この第IV区画をさらに5m単位で区画した第V区画も使用した。地区割りについては、(財)大阪文化財センター(現:(財)大阪府文化財調査研究センター)の地区割りに依拠している。

④ 遺構番号

遺構の種類については、遺構番号の前に記し、遺構番号については、すべて遺構について種類に関係なく通し番号とした。ただし、調査が2年度に渡っているため、調査年度における通し番

号である。基本整理が終了した後も現場で使用した番号は混乱をさけるため変更していない。
調査区については、今回2年度分を報告するため、平成11年度調査区をA区、平成12年度調査区
をB区と呼称することとした。
(井西)



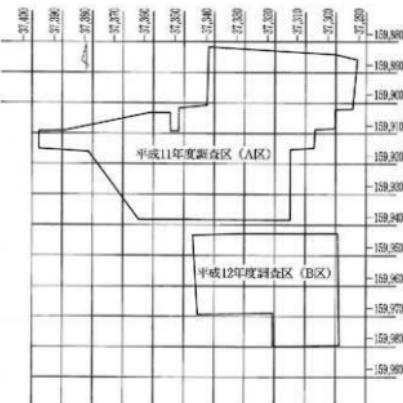
第1図 調査地位置図 (1:25,000)

II 環境(第4図)

野々上西遺跡は基本的には南北に連なる羽曳野丘陵上に位置している。羽曳野丘陵は塚穴古墳
や善正寺跡の立地する付近が丘陵北部の頂部にあたり、標高70m前後を測る。善正寺跡の北辺部
付近から竹内街道まで北に向かって急激に降下し、竹内街道や野中寺跡付近では標高47m前後と
なる。地形はさらに北に向かって緩やかに傾斜し、野々上西遺跡では標高43mとなる。次に、遺
跡の微地形を見ると基本的には北に下降する緩やかな斜面に立地している。11年度の調査地の北

西部において南北方向の深い谷を検出した。遺跡の北方にある古市大溝に注ぐものであろう。この谷は8世紀の段階で埋没していることが今回の調査で確認され、古市大溝の埋没とも関わりをもつと考えられる。12年度調査区の東側にも南北方向の谷を検出している。遺跡と東に隣接する野々上遺跡との間に見られるもので野々上西遺跡と野々上遺跡とは隣接するものの谷を隔てた別の丘陵上に位置することが確認された。

(橋本)



第2図 調査区配図

III 調査成果

I. 基本層序 (第5図・図版8)

A区 調査前に存在した府営住宅の建設時における地形の改変が激しく、造構および遺物包含層の残存状況はきわめて悪く、府営住宅建設時における盛土を除去すると地山層となる。特に調査区の北東部、南西部については大きく搅乱されていた。

B区 北側基本層序 全体的には府営住宅造成土を除去したら、地山層が確認された。

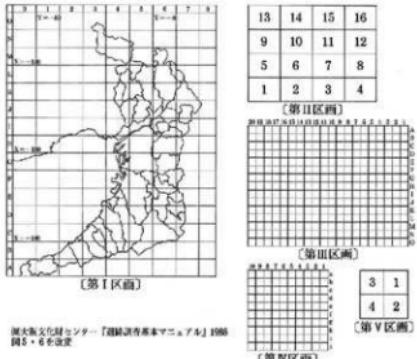
南側基本層序

第0層……府営住宅撤去後の残土。層厚約40～50cm。

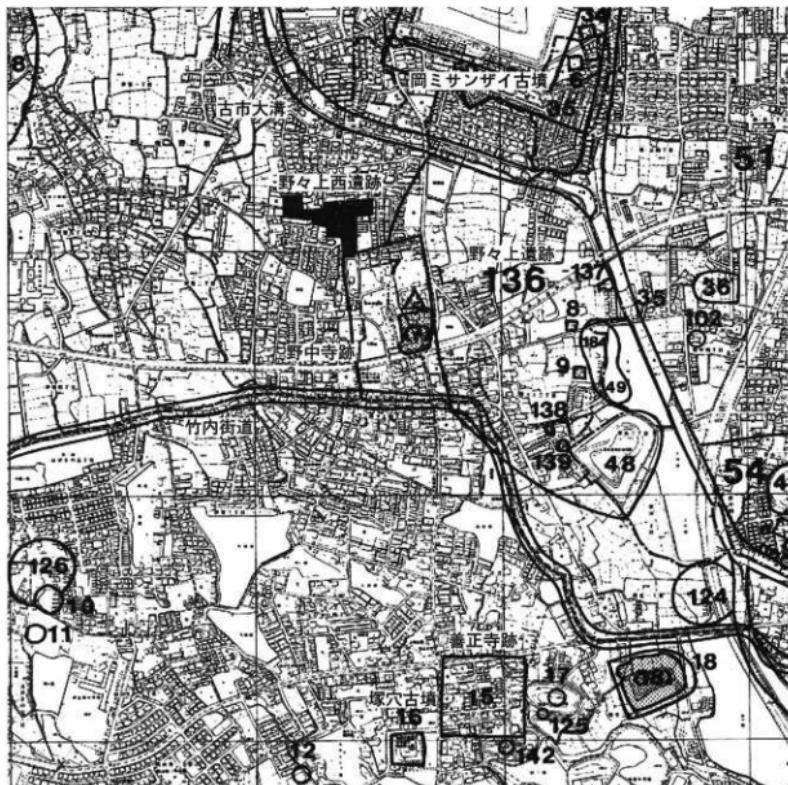
第1層……7.5YR6/1、褐色灰色土。調査区の西側、J14-f・g-3・4区でのみ確認された。遺物の量は少ないが、古墳時代後期から奈良時代までの遺物が含まれている。層厚約10～20cm。

整地層……10YR4/6、褐色土。調査区の東側、J14-2-e～g区に堆積しており、遺物の量は少ないが、奈良時代の遺物が確認された。層厚約10～35cm。東に向かって下がっていく、旧地形の上面に堆積しており、層厚は東に向かって厚くなる。

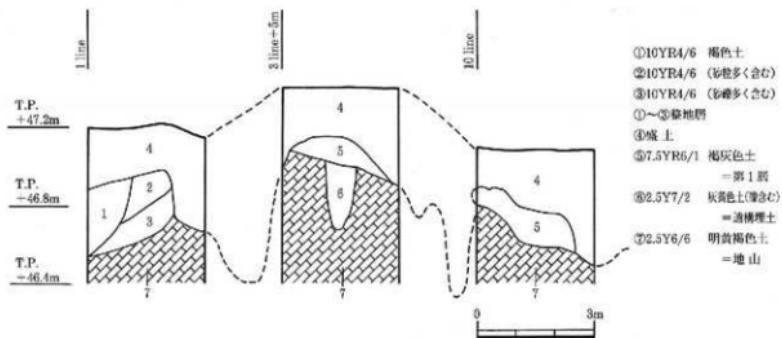
調査区中央部分は旧地形が高く、包含層の堆積は確認されなかった。



第3図 地区割り図



第4図 周辺遺跡分布図 (1:10000)



第5図 平成12年度、基本層序模式図 (B区)

1. A区 遺構と遺物（第18図・図版1～3）

平成11年度の調査ではピット群、土坑、溝、谷などの遺構を検出した。なお本報告書に用いた遺構番号は、現地調査中に付したものとそのまま用いた、調査後検討した結果抹消し、欠番としたものもある。

以下、主要な遺構、遺物について簡単に述べる。

ピット群

ピットは調査区の全域に確認できたが、II4-c3に集中して検出した。幅2mの間隔で4間にわたって南北に2列に見られる。各ピットの直径は20～40cm、深さ20cm程度である。埋土は黄灰色粘質土である。出土遺物はなく、時期は不明である。

土坑1 II4-b10にある。平面形は隅丸方形プランを呈し、一辺65cm、深さ30cmである。

埋土は褐色粘質土（マンガンを含む）である。遺物は出土しなかった。

土坑2 II4-b9にある。平面形は隅丸方形プランを呈し、一辺70cm、深さ5cm程度で非常に浅い土坑である。埋土は褐色粘質土である。遺物は出土しなかった。

土坑3 II4-b8にある。平面形は楕円形を呈し、長径60cm、短径40cm、深さ20cmである。

埋土は褐色粘質土である。遺物は出土しなかった。

土坑4 II4-b6にある。平面形は卵型に近い楕円形を呈し、長軸86cm、短軸67cm、深さ16cmである。中央部に直径16cm、深さ15cmの小さなピットがある。埋土は褐色粘質土（マンガン含む）である。遺物は出土しなかった。

土坑5 II4-c3にある。平面形は正方形に近い隅丸方形を呈し、一辺130cm、深さ40cmである。埋土は褐色粘質土である。遺物は出土しなかった。

土坑6 II4-c3にある。平面形は隅丸方形を呈し、長辺170cm、短辺70cm、深さ40cmである。埋土は褐色粘質土である。遺物は出土しなかった。

土坑7 II4-c4にある。平面形は不定形を呈し、約半分は攪乱土坑に切られている。深さは30cmである。埋土は褐色粘質土である。遺物は出土しなかった。

土坑8 II4-c4にある。平面形は楕円形を呈し、長径80cm、短径50cm、深さ30cmである。埋土は褐色粘質土である。遺物は出土しなかった。

土坑9 II4-b10土坑1の南にある。平面形は隅丸方形プランを呈し、一辺70cm、深さ30cmである。埋土は褐色粘質土である。遺物は出土しなかった。

土坑10 II4-c4にある。平面形は円形を呈する。直径40cm、深さ30cmである。

埋土は褐色粘質土である。遺物は出土しなかった。

土坑11 II4-c6にある。平面形はほぼ正方形に近い隅丸方形を呈し、一辺200cm、深さ40cmである。底は二段になって平坦である。埋土は淡青黄色粘質土である。遺物は出土しなかった。

焼土坑（第6、7図・図版4、11） II4-b6にある。平面形はほぼ正方形を呈し、一辺90cm、深さ26cmである。土坑の側壁は熱を受けてよく焼けている。底部は焼けていない。埋土は6層

に分かれ、上層から①淡黄灰色粘質土、②淡灰黄色粘質土（炭少量含む）、③赤灰色粘質土（炭、焼土少量含む）、④黒灰色粘質土（炭含む）、⑤暗灰色粘質土（炭含む）⑥淡灰色砂質土（炭、焼土少量含む）である。土坑の壁は焼けて、堅くしまっている。底は火を受けていない。遺物は奈良時代の土師器の壺（11）が1点出土した。

溝2・3 I14-c7にある。幅30cm、深さ15cmの溝が二条3mの間隔で南北方向に走る。埋土は褐色粘質土である。遺物は出土しなかった。

溝4 I14-b10にある。南北方向の浅い溝である。幅は150cmである。深さは15cmである。埋土は褐色粘質土である。遺物は須恵器、土師器の細片を少量が出土した。

溝6 I14-b9にある。南北方向の浅い溝である。幅は80cmである。深さは15cmである。埋土は褐色粘質土である。遺物は土師器の細片を少量出土した。

溝7 I14-b9にある。南北方向の浅い溝である。幅は80cmである。深さは15cmである。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は土師器の細片が少量出土した。

溝8 I14-b8にある。南北方向の浅い溝である。幅は120cmである。深さは10cmである。埋土は褐色粘質土である。遺物は土師器、須恵器、瓦の細片が少量出土した。

溝12 I14-b6～b7にかけて検出したもので、東西方向の溝である。溝13の北側にある。幅30cm、深さ20cmである。埋土は褐色粘質土である。遺物は出土しなかった。

溝13 I14-b6～b8にかけて検出したもので、東西方向の溝である。幅30cm、深さ20cmである。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は出土しなかった。

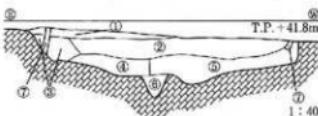
溝27 I14-b10にある。東西方向の浅い溝である。幅は20cmである。埋土は褐色粘質土である。遺物は土師器の壺（10）が1点出土した。

溝28・29 H14-j6にある。幅60cm、深さ20cmの溝が二条3.5mの間隔で南北方向に走る。埋土は褐色粘質土である。遺物は出土しなかった。

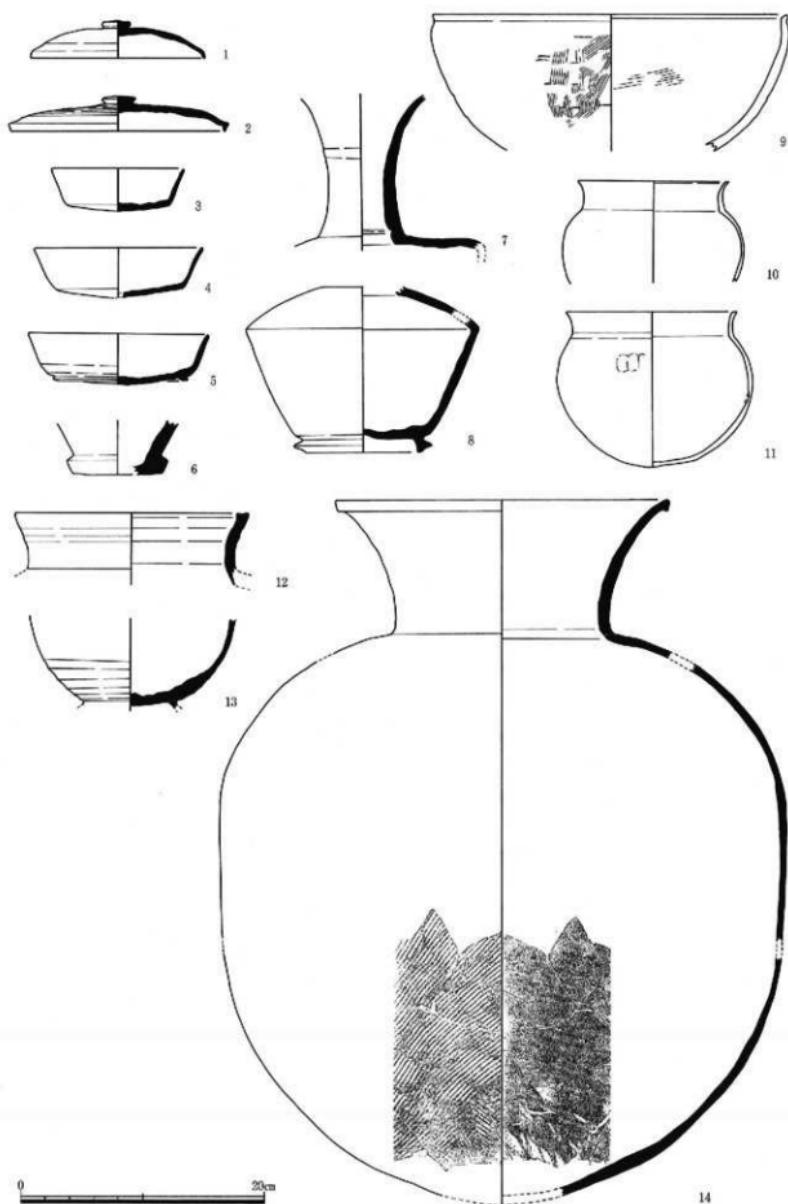
谷（第7、8図・図版11、12） I14-a6～b6にかけて南北方向に溝状にのびる谷を検出した。幅は5～6m、深さは50～60cmである。底は二条の溝状になっている。埋土は灰色砂である。遺物は比較的多量に出土した。（1、2）は須恵器の壺蓋、（3～5）は須恵器の壺身、（6）は須恵器の練り鉢、（7、8、12、13）は須恵器の壺である。（9）は土師器の鉢、（14）陶質土器である。外来系の土器の可能性がある。これらの土器は谷の埋没時期を示すもので、奈良時代にはこの谷は埋没していたことがうかがえる。

包含層出土の土器（図版11、12）

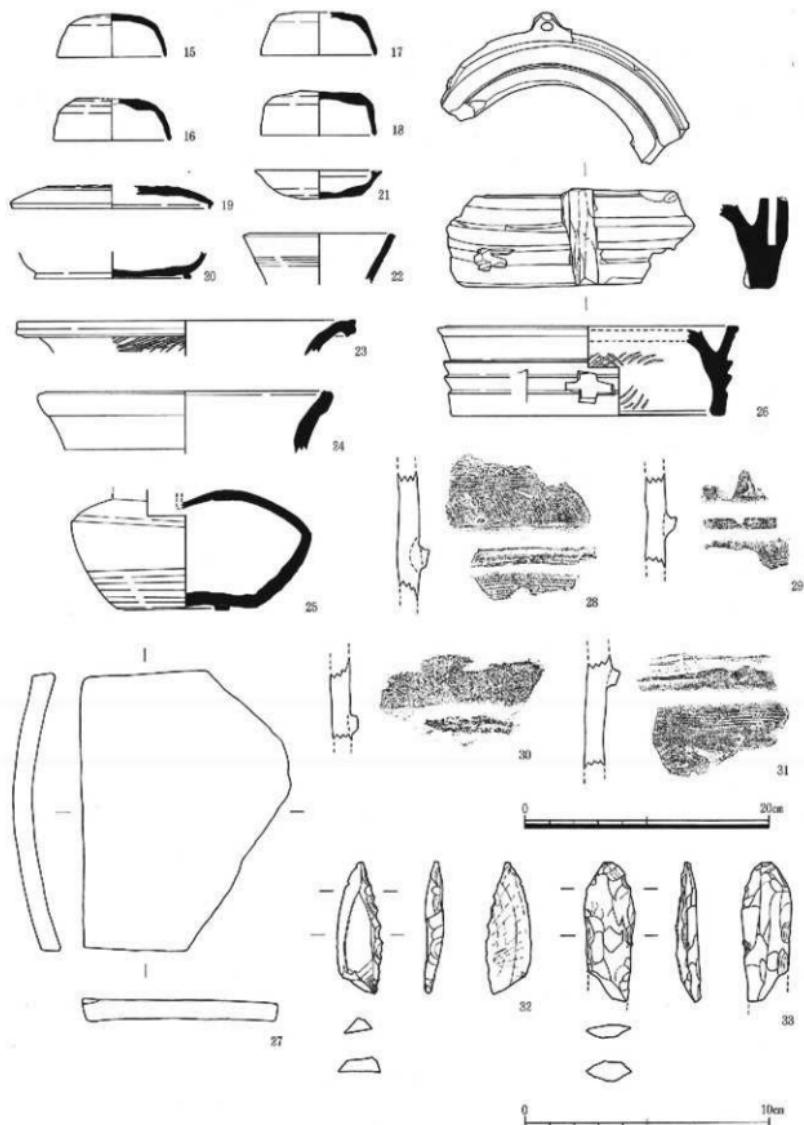
遺構面の上部に堆積した黄灰色粘質土から少量ではあるが、遺物が出土した。黄灰色粘質土には旧石器から中世までの時期の遺物が含まれており、中世以降の耕作土層と考えられる。



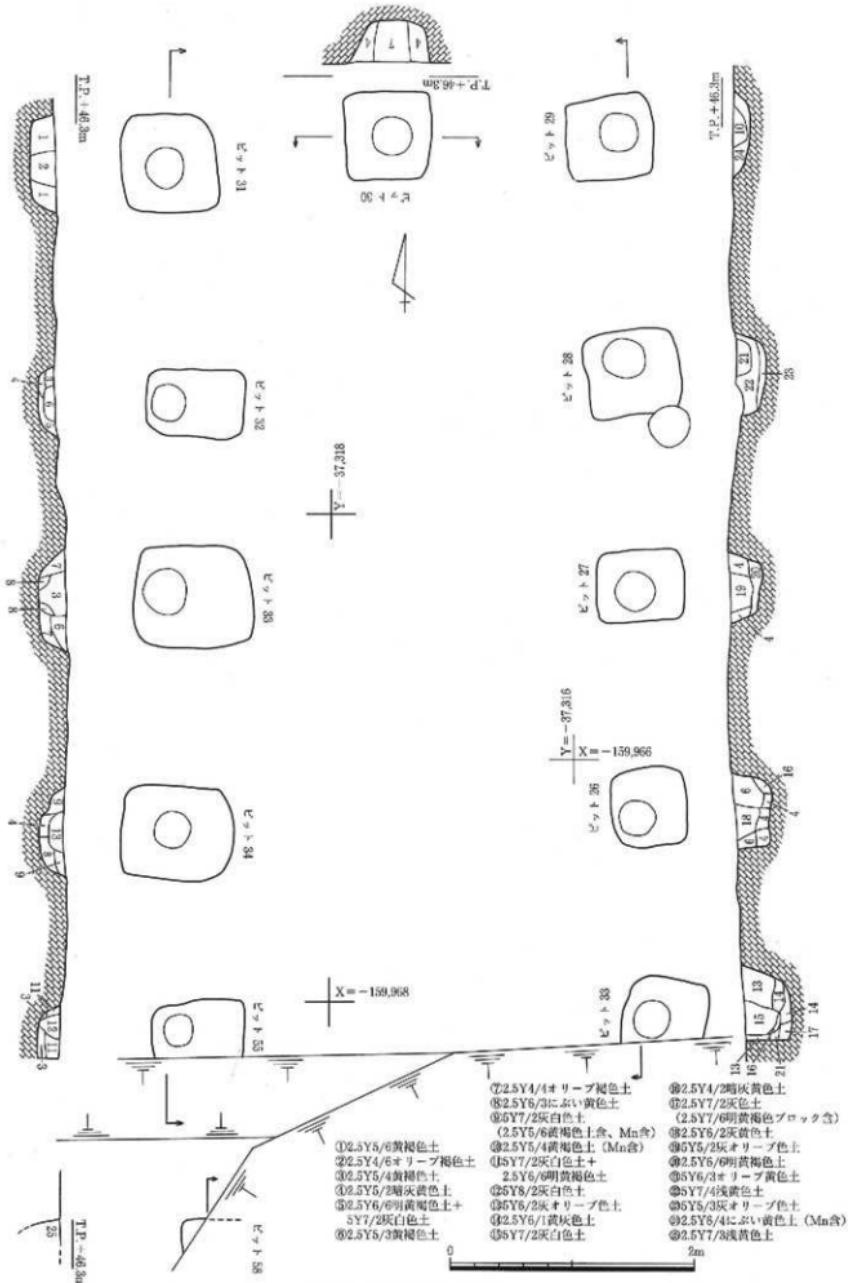
第6図 燃土抗断面図



第7図 山土遺物実測図1



第8図 出土遺物実測図2



第9図 建物70平面・断面図

(15~19) は須恵器の壺蓋、(20, 21) は須恵器の壺身、(22) は須恵器の鉢、(23, 24) は須恵器の甕、(25) は須恵器の横瓶、(26) は須恵器の円面鏡である。(28~31) は円筒埴輪片である。(32) はサヌカイト製の翼状剥片である。(33) はサヌカイト製の石槍である。

2. B区、遺構と遺物（第17図・図版5、6）

遺構面は地山層上面で1面確認された。J14-e~g2区で確認された整地層の上面でも遺構検出を行ったが明確な遺構は確認できなかった。しかし、溝1を切っているピット73出土遺物が、9世紀代を示すので整地層上面からの切り込みである可能性も否定できない。

建物70（第9図・図版9） J14-g2区で検出した。2×5間の南北棟である。南側はため池によって削平されており、梁間の中央と東端は確認できなかったが、西側では遺構面が残されており、ピット58より南には柱列は延びないことが確認された。主軸方向はほぼ磁北で、柱間寸法は柱心で梁間が約1.8~1.9m、検出長3.7m、桁行は2.0~2.3m、検出長約9.6m、柱径0.2~0.3m、深さは0.1~0.3mを測る。柱堀方は0.5~0.65mを測り、平面形は方形もしくは長方形を呈する。埋土は2.5Y5/2暗灰黄色土、2.5Y5/3黄褐色土で、1~5層に分かれる。遺物は出土しなかった。

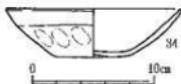
塙71（第15図・図版7、9） J13-e10、J14-e1・2区で検出した。東側は調査区外である。主軸方向はE-4.5°-Sで、柱間寸法は柱心で約1.9~2.3m、検出長は12.88m、柱径は約0.12~0.2mを測る。埋土は3~4層に分層でき、上層は2.5Y6/4にぶい黄色土などで、下層は2.5Y6/2灰黄色土などでやや粘性をおびる。

ピット群 直径約0.2~0.3mを測る円形のピットと一辺約0.4~0.6mを測る方形の小穴とを検出した。方形を呈するピットは、建物を構成するピットと形状・埋土が類似しており、奈良時代の遺構であると思われる。円形を呈するピットについては、遺物の出土がなかったため時期を限定することはできない。柱痕跡についても確認されたものはなかった。報告では、奈良時代のピットについて記述する。

ピット53（第16図） J14-g5区で検出した。堀方は一辺0.64m、柱径は0.2mを測り、平面形は正方形を呈する。断面形は浅い皿形で、深さは0.19mを測り、埋土は2.5Y7/4浅黄色土1層である。擾乱によって上面はかなり削平されている。

ピット56（第16図） J14-g4区で検出した。堀方は一辺0.5m、柱径は0.23mを測り、平面形は正方形を呈する。断面形は楕形で、深さ0.16mを測り、埋土は2.5Y5/3黄褐色土（マンガン含む）1層である。擾乱によって上面はかなり削平されている。

ピット73（第10図・図版10、14） J14-f1区で検出した。堀方は推定直径ほぼ0.2m、平面形は円形を呈する。断面形はU字形を呈し、深さは0.3mを測り、埋土は暗灰褐色土1層である。底面で9世紀代の土師器の壺（34）が出土した。



第10図 ピット73出土遺物実測図

土坑2 (第16図) J 14-f 1区で検出した。長径1m、短径0.5m、平面形は長円形を呈する。断面形は浅い皿形を呈し、深さは0.07mを測り、埋土は2.5Y5/3黄褐色土(砂礫、マンガン含む)1層である。遺物は出土しなかった。

土坑12 (第11、16図・図版14) J 14-f・g 1区で検出した。

長径3.7m、短径2.6m、深さ0.38mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。断面形は皿形を呈し、埋土は5層に分かれる。最下層の5層では、炭が混じっていた。2層から奈良時代の土師器の坏(35)と袋状鉄斧(84)等が出土した。



第11図 土坑12出土遺物実測図

溝1 (第16図・図版7) J 14-f・g 1区で検出した。検出延長は8.9m、幅1.5~2.9m、方向はほぼ南北方向で直線に延び、北側は溝16に合流する。南側は攪乱で削平され、溝4とは埋土の堆積状況からも同一の遺構ではないと考えられる。断面形は浅い皿形を呈し、深さは0.1~0.5mを測り、埋土は2.5Y5/3黄褐色土(マンガン含む)である。

溝4 (図版7) J 14-g 1区で検出した。検出延長は4m、幅2.15~2.5m、西肩はやや膨らむが、ほぼ南北方向に直線的に延びる。北側は攪乱によって削平されている。南側はため池により削平される。断面形は浅い皿形を呈し、深さは0.07mを測り、埋土は10YR6/8暗黄褐色土1層である。遺物は出土しなかった。調査の段階では平面形から遺構の種類を溝としていたが、埋土は整地層と酷似しており、旧地形の窪みを整地する時に埋めた可能性も推測できる。

溝7 (第16図) J 14-f・g 1区で検出した。検出延長は13m、幅0.35~0.8m、方向は南北方向に直線的に延び、F 6-6-J 14-f 1-3区では、上面が削平されているため一度消えるが、北側は溝16に合流する。南側は上坑12に切られる。断面形は浅い皿形を呈し、深さは0.05~0.1mを測り、埋土は2.5Y7/6明黄褐色土1層である。遺物は出土しなかった。

溝15 (第16図) J 14-f・g 1区で検出した。検出延長は10m、幅0.5m、方向はN-7°Eではほぼ直線に延び、北側は溝16に合流する。南側は攪乱によって削平される。断面形は逆台形を呈し、深さは0.17m、埋土は10YR7/6明黄褐色土1層である。遺物は出土しなかった。

溝16 (第13、16図・図版8、10、13、14) J 13-e 10~J 14-c・f区で検出した。検出延長は38.5m、幅約2.8m、主軸方向はE-4.5°-Sではほぼ堀71と平行し、東西方向に直線的に延びる。東西側は調査区外である。断面形は逆台形、深さは0.42mを測り、埋土は4層に分かれ、上層は2.5Y4/2暗灰黄土で、下層は2.5Y5/3黄褐色土でやや粘性がある。遺物は奈良時代の須恵器の环身(46~48)、环蓋(42~45)、壺(50)、底部(49、52、53)、平瓶(51)、土師器の环身(54)、小型壺(55)、鍋の把手(62)、甕(58~61)、高环(56、57)、丸瓦(63)が出土した。

溝36~38 (第13、16図・図版7) J 14-f・g 3区で検出した。検出延長は17.6m、幅は溝36が0.93m、溝37が0.63m、溝38が1.94mを測り、溝36と37はF 6-6-J 14-g 3-3区、南から約7.9mの位置で合流する。方向はN-3.5°-Eではほぼ直線に延び、北側は溝16に合流する。南側は調査区外である。断面形は浅い皿形を呈し、深さは0.1~0.3mを測り、埋土は溝36が2.5Y6/2灰

黄粘土で、溝37が2.5Y6/6明黄褐色粘土1層である。溝37が溝36に切られている。遺物は溝36から奈良時代の須恵器の坏身(67)、壺(68)、土師器の高坏(65)等が溝36から上部器の壺(64)等が、溝38からミニチュア土器(66)が出土した。

落ち込み群(図版8) J14-f・g-3・4区で検出した。

落ち込み44(第12、16図) 検出長7.3m、幅1.3~2.1m、平面形は不整形を呈する。深さは0.16mを測り、断面形は浅い皿形である。埋土は10YR6/4にぼい黄橙土(マンガン含む)である。須恵器の坏蓋(36、37)、土師器の羽釜(38)が出土した。

落ち込み46 長径2.5m、短径1.7m、平面形

はほぼ長円形を呈する。深さは0.07mを測り、

断面形は浅い皿形である。埋土は10YR6/2

灰黄褐色土(マンガン含む)1層である。北側は攪乱により削平される。

落ち込み47~49(第12、16・図版13)は検出

長5.8m、幅1.3~2.7mを測り、平面形は不整

形を呈する。断面形は浅い皿形で、深さは0.

28mを測り、埋土は2層に分かれ、上層は10

YR6/2灰黄褐色土(マンガン含む)、下層は

10YR6/2灰黄褐色土(砂礫、マンガン含む)

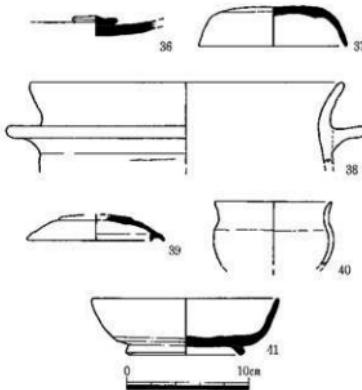
でやや粘性が高い。落ち込み48から須恵器の

坏身(41)、坏蓋(39)、土師器の壺(40)が

出土した。

包含層出土遺物(第14図・図版14) 須恵器の坏蓋(69、70)、坏身(71、72)、高坏(73)、壺(74)、壺(79、80)、土師器の鉢(75)、羽釜(76)、野中寺式軒丸瓦(81)、平瓦(82)、円筒埴輪(77、78)、サヌカイト片(83)が出土した。出土土器については、奈良時代に属するもので、(81)は、南約200mに位置する野中寺所用瓦である。

(井西)



第12図 落ち込み44・48出土遺物実測図

まとめ

野々上住宅建替えに伴って文化財の調査が実施されたのは、今回の調査で3次となる。1次調査は住宅建設地のもっとも北側に位置し、遺跡は古市大溝の範囲に入る。(『古市大溝発掘調査概要』1997年3月 大阪府教育委員会 以下‘96年度調査と略称する。)

‘96年度調査においては、古市大溝の南肩が検出された。古市大溝の築造年代については、多くの議論がなされ、大きく2説に分かれている。調査成果では、築造年代について「大溝掘削面(第8層)の上層、第7層の年代から7世紀前半をやや遡る時期が妥当といえる」という見解が

出されている。

2次と3次の調査は‘99年度と’00年度に実施され、今回の報告によるものである。

‘99年度調査では、古市大溝に向かって谷の落ちが確認された。谷の埋土からは硯、陶質土器など寺院と関係した遺物が出土した。上面がかなり削平されている可能性は否定できないが、谷部より南側、’00調査において検出された溝16までの範囲は、古代においては空間地帯であった可能性が推測される。

‘00年度調査については、まず遺構の時期について整理しておきたい。

遺構面は、東側に堆積していた整地層上面とその下面の2面、下面是包含層（第1層）の下面と同一遺構面である。遺構面はほぼ8世紀半ば、遺構存続順位については、遺構内から出土した土器で判断した。

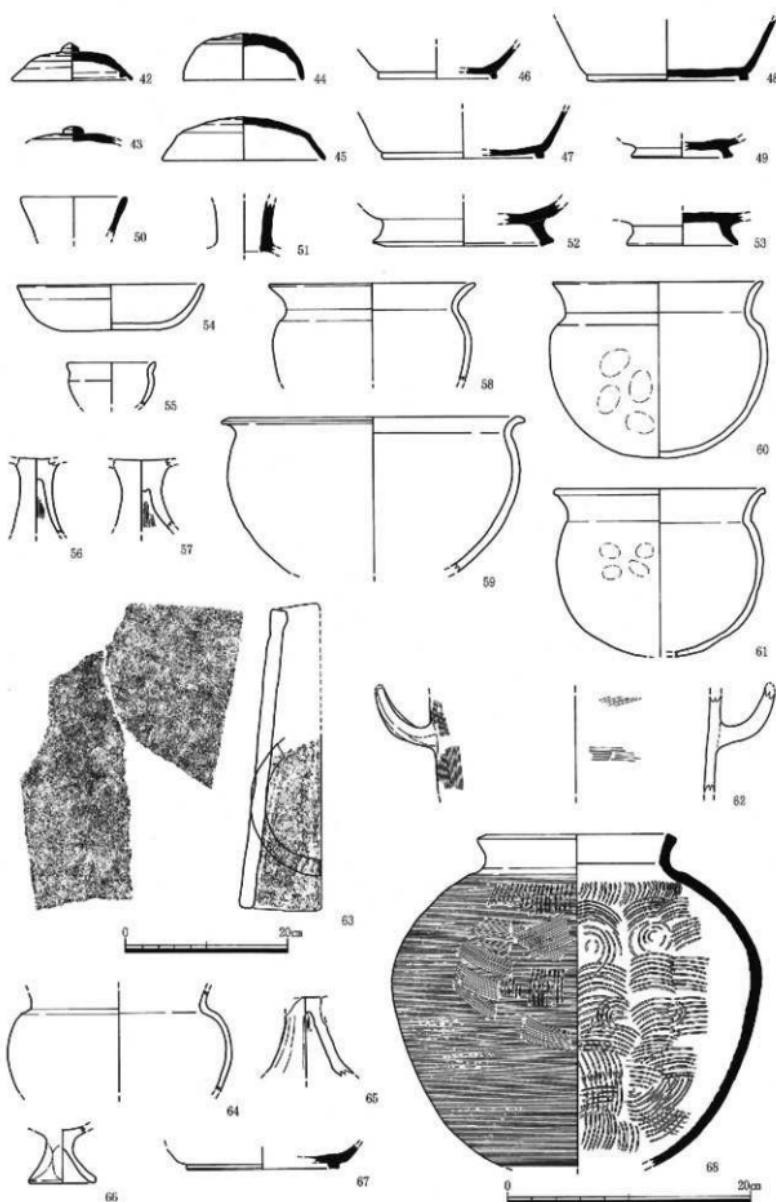
溝16→① 建物70・溝36～38→② 墀71→③

まず、北側に下がる地形の東西に区画溝を掘削（溝16）し、建物（建物70）と南北溝（溝36～38）を配置する。塀71は溝16に沿って調査区全体に繋がってはいなかったが、区画内を古市大溝から隠す意味があったのかもしれない。

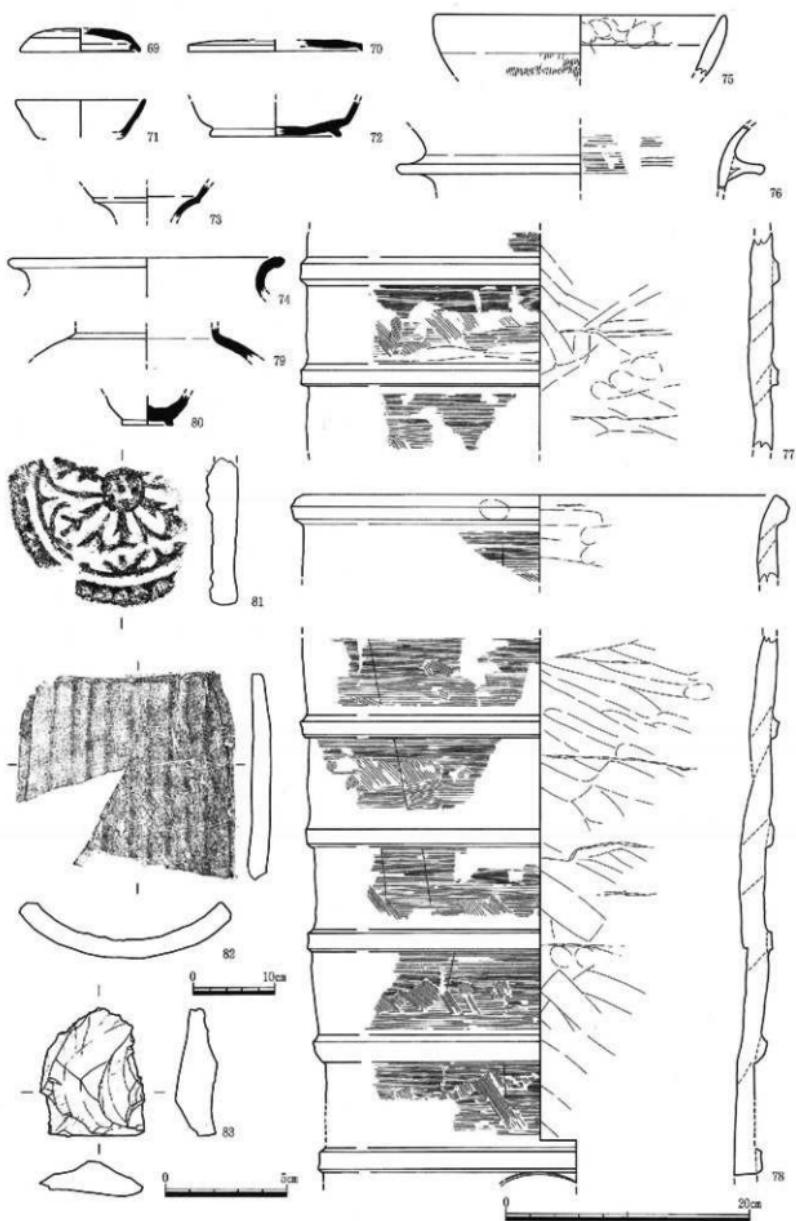
最後に野々上西遺跡と野中寺との関係について少しまとめておきたい。

羽曳野市域の周辺に居住した氏族は、主として5世紀末から6世紀に活躍する。この時期は古代国家が本格的に形成されていく時期である。この古代国家形成の状況は、寺院建築としてビジュアルに人々の心に浸透し、渡来文化である仏教文化が華開くこととなる。畿内、特に大和・河内においては飛鳥時代から古代寺院が建立され、野々上西遺跡が位置する羽曳野市域においても、7世紀半ば以降古代寺院が建設される。市域で最も古く位置づけられるのは西琳寺であるが、野中寺・善正寺・葛井寺と時期を遅れず相次いで建立されていく。これら古代寺院は、意図的に配置された渡来系氏族の氏寺に比定する説が有力である。その中で野中寺については船氏が有力である。船氏については、職掌として古市大溝の管理を司り、居住域が寺院東側の野々上遺跡に位置すると推定されている。南河内において重要な意味を持つ古市大溝を管理する氏寺である野中寺における寺地は、東西については地形の制約を受けほぼ2町、南北については今回検出された溝16までの距離はほぼ3町あり、かなり広大ではあるが、船氏のもつ勢力と重要性から推し量ると、寺地の範囲と推測することは可能かもしれない。

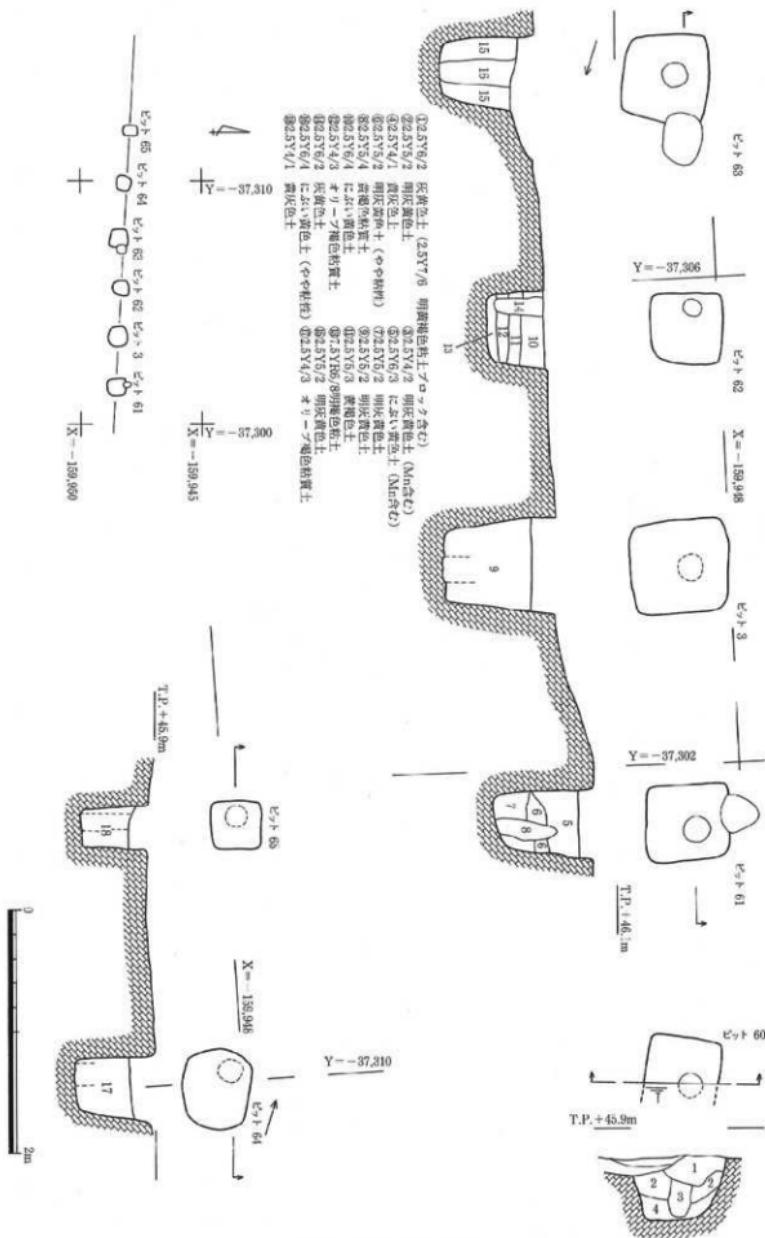
(井西)



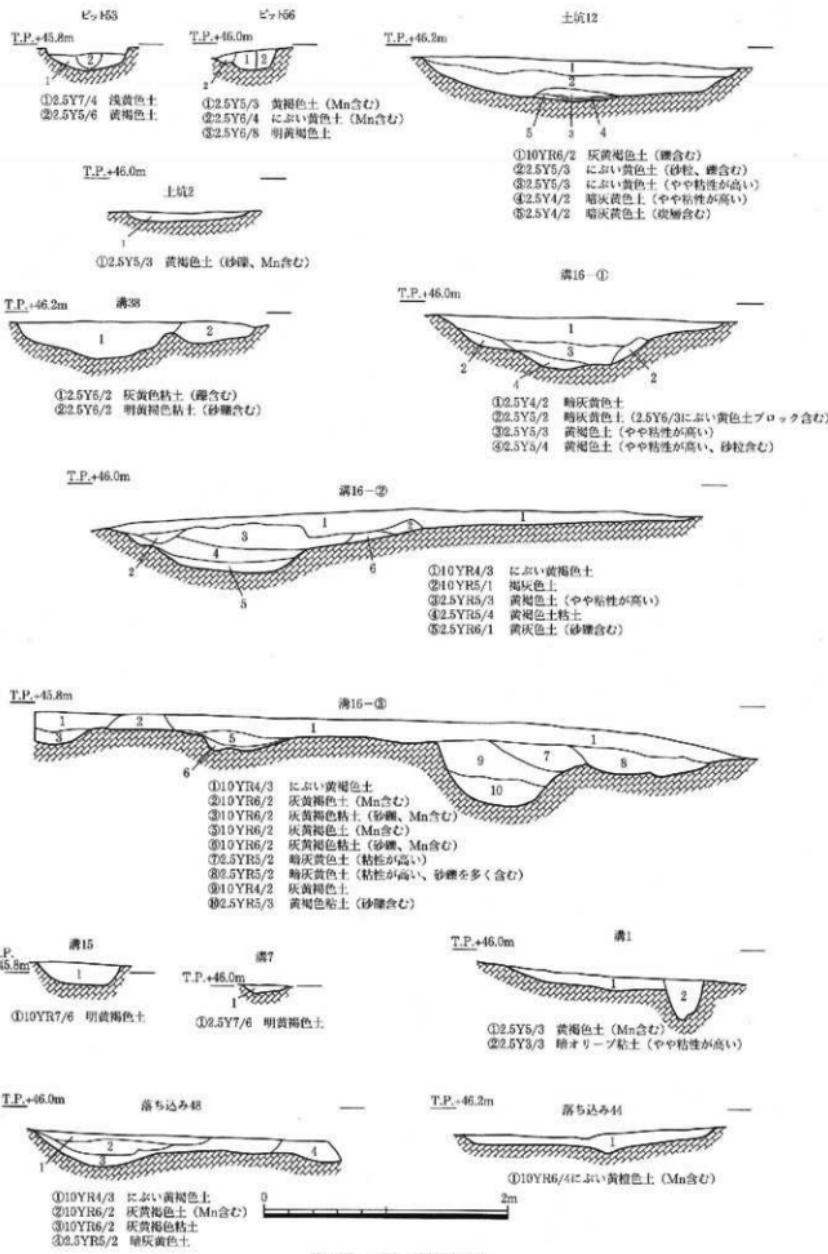
第13図 满16・36~38出土遺物実測図



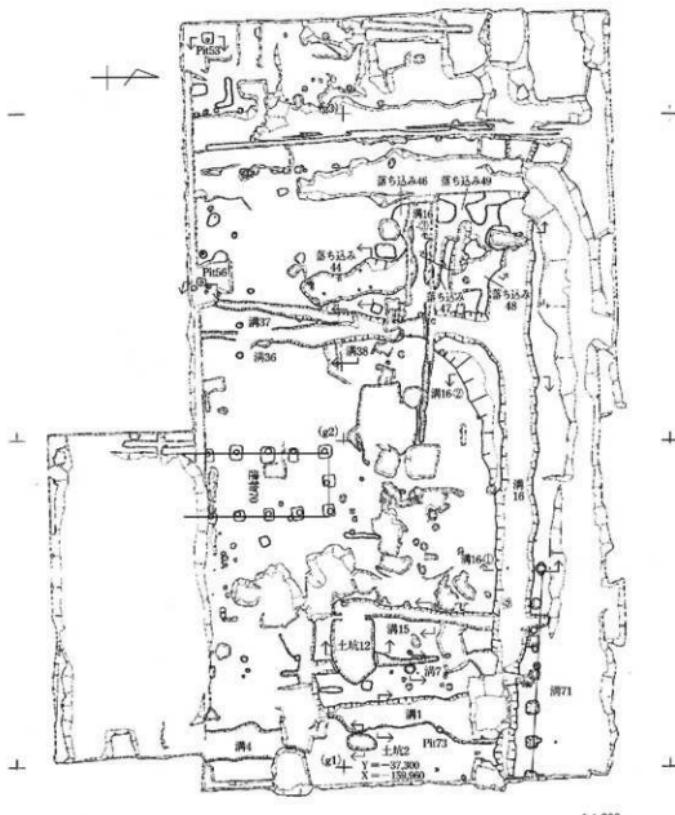
第14図 包含層出土遺物実測図



第15図 建71平面図・断面図

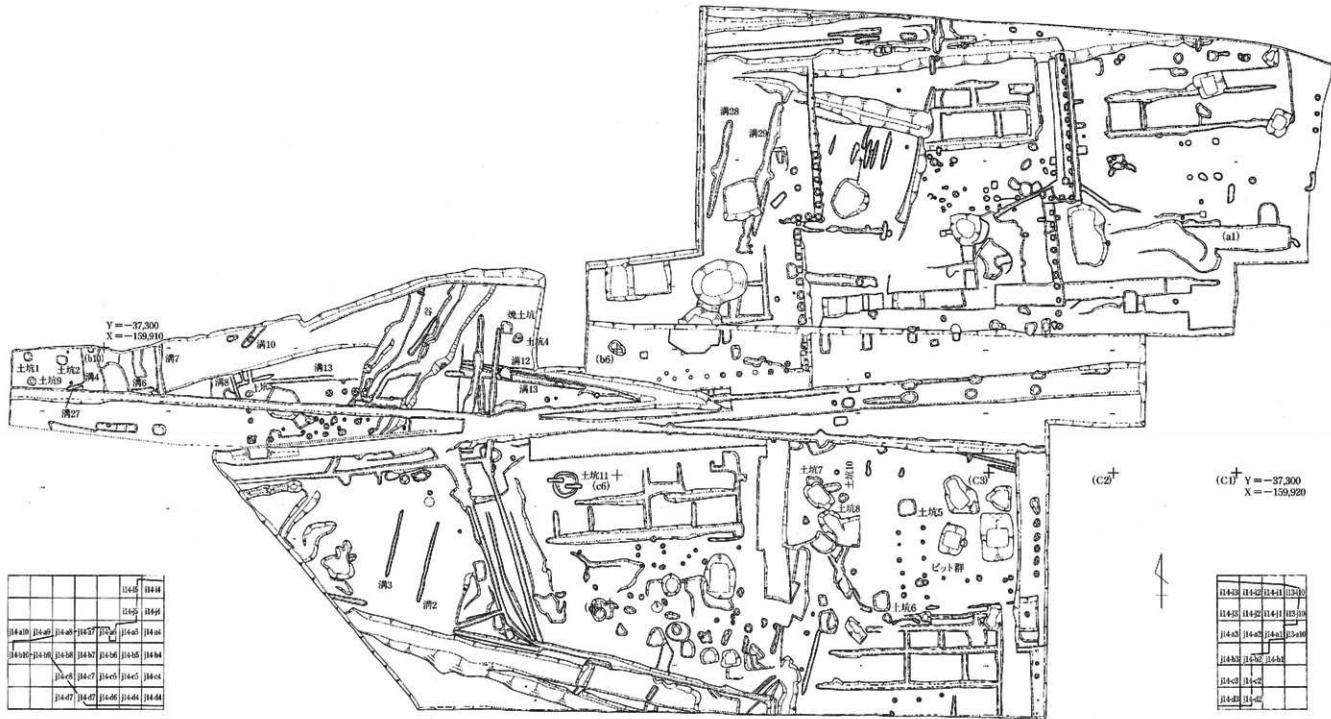


第16図 B区、遺構断面図



1:200

第17図 B区、造構全体図



第18図 遺構全体図（A区）

報告書抄録

ふりがな	ののうえにしいせき
書名	野々上西遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	2000-4
編著者名	橋本高明、井西貴子
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL06-6941-0351
発行年月日	2001年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村 遺跡番号					
ののうえにしいせき 野々上西遺跡	羽曳野市 野々上 5丁目	27222	37° 6' 0"	160° 2' 0"	A 区 平成11年9月 平成12年1月 B 区 平成11年9月 平成12年1月	3,400m ² 1,500m ²	羽曳野南 住宅建て 替え工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
野々上遺跡	集落	奈良時代 古墳時代後期 から奈良時代	A区：谷、溝、 ビット B区：掘立柱建 物、区画溝、堀	土師器・須恵 器・瓦・硯	区画溝と区画 溝内に掘立柱 建物

図版

図版一 平成11年度調査区全景（A区）



(東から)



(東から)

図版二 平成11年度調査区全景（A区）



(東から)



(西から)

図版三 平成11年度調査区全景（A区）

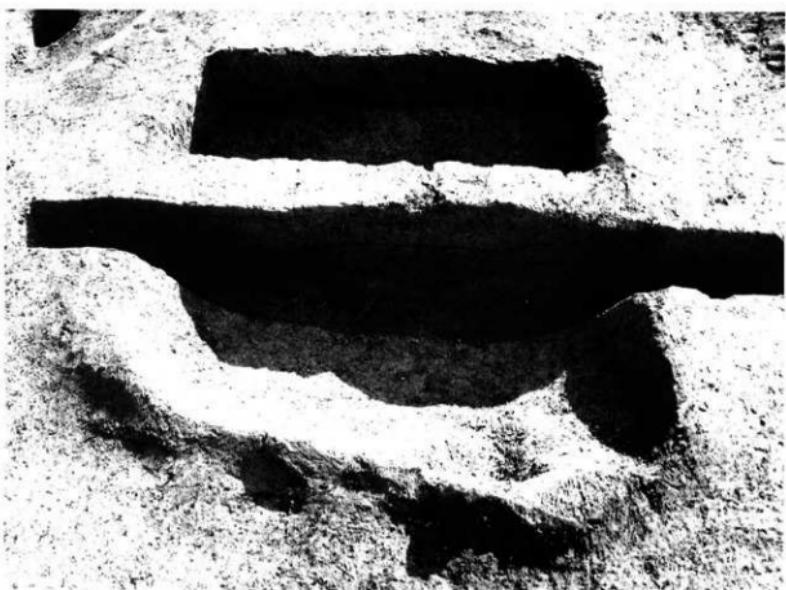


(東から)

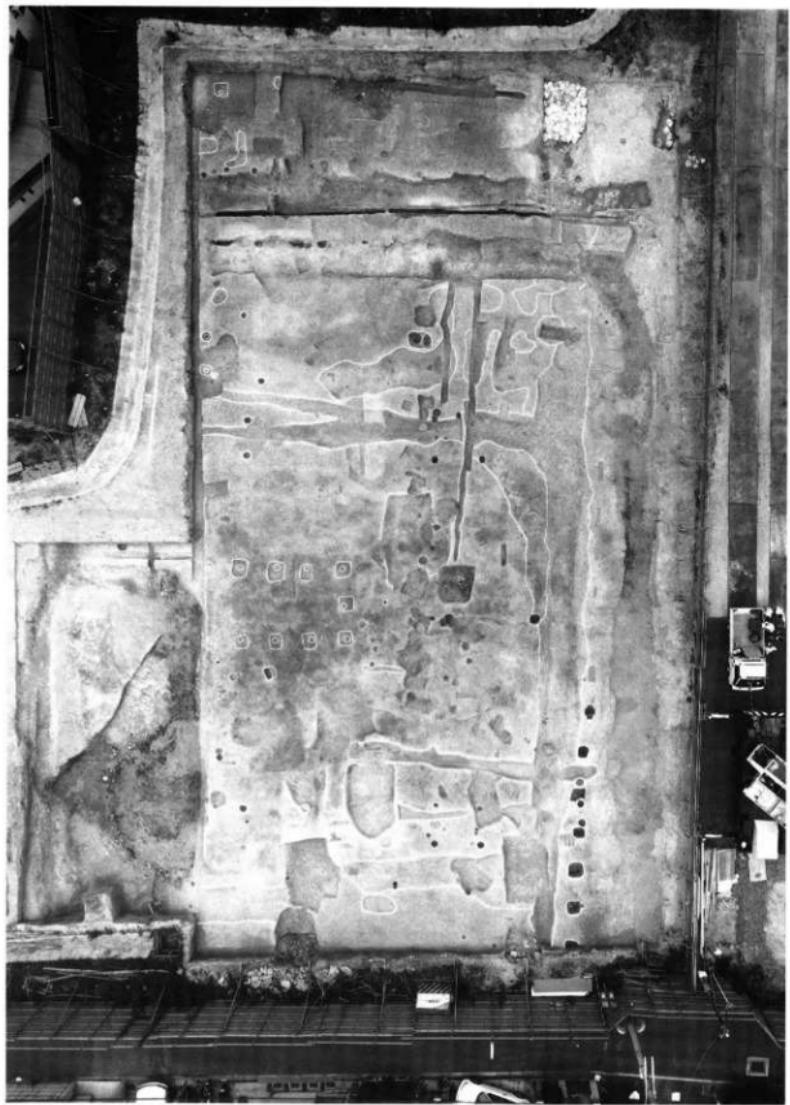


(北から)

図版四 平成11年度調査区焼土坑



図版五 平成12年度調査区全景（B区）

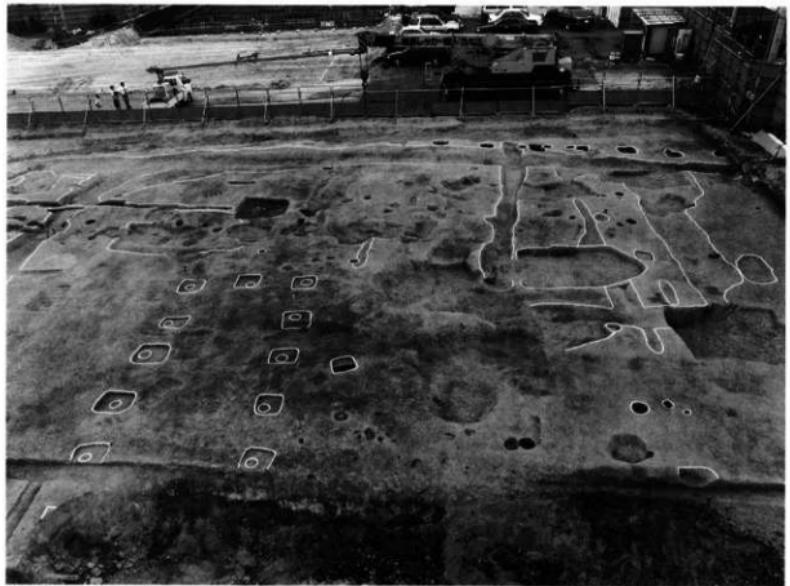


全 景

図版六 平成12年度調査区全景（B区）



全景（南東から）



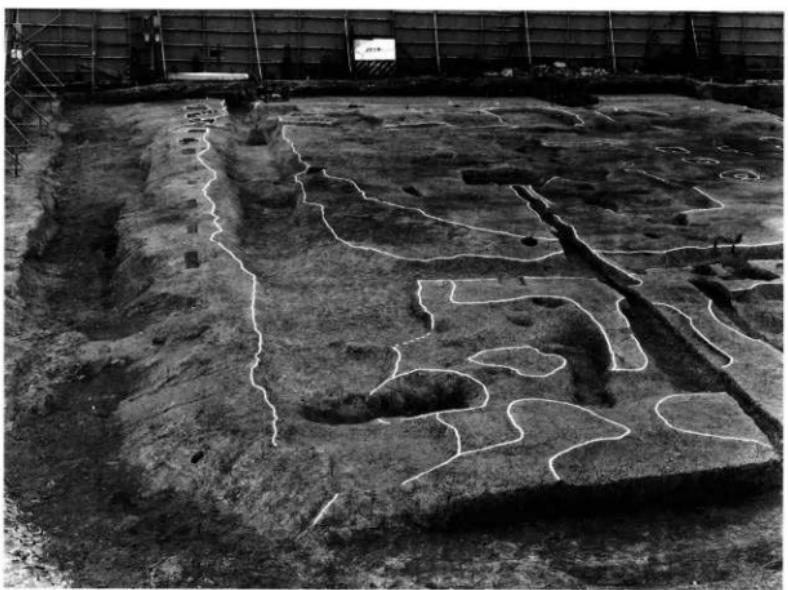
東側全景（南から）



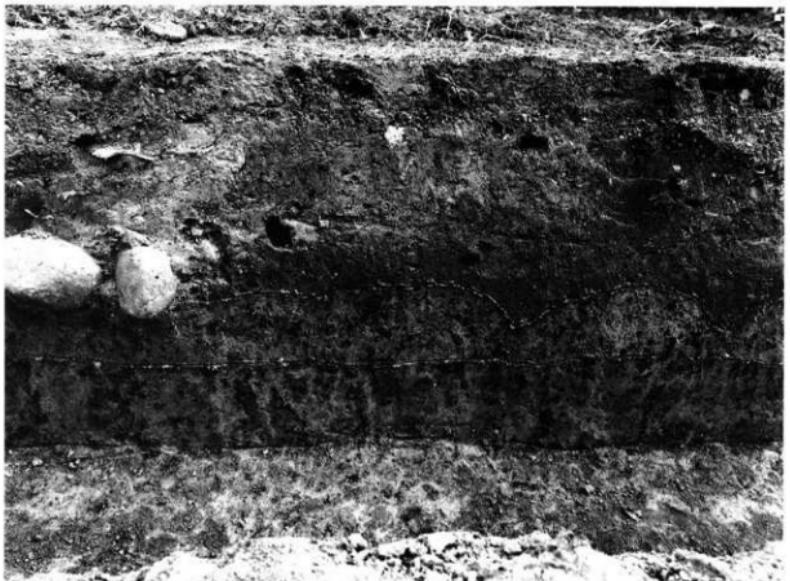
溝1・4、堀71（南から）



溝36・37（南から）



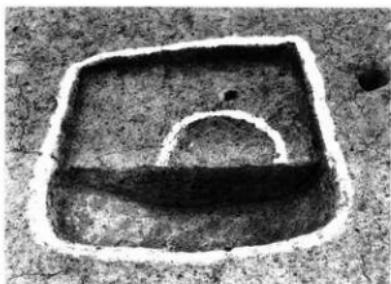
溝16、落ち込み群（西から）



基本層序 南壁断面（北から）



建物70（東から）



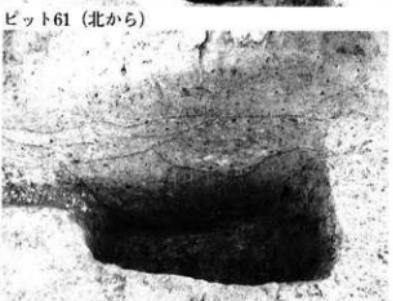
ピット28（東から）



ピット61（北から）



ピット62（北から）



ピット60（西から）



溝16-②断面（西から）



溝16-①（東から）



ピット73 遺物出土状況（西から）

図版十一 平成11年度調査区出土遺物



18



17



2



25



4



11



5



26



8



14

図版十三 平成12年度調査区出土遺物



42



58



44



60



85



41



80

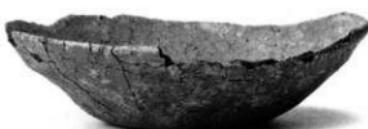


61

図版十四 平成12年度調査区出土遺物



55



34



78

81



82



84



大阪府埋蔵文化財調査報告 2000-4

野々上西遺跡

発行 大阪府教育委員会

〒540-8571

大阪市中央区大手前2丁目

TEL 06-6941-0351

発行日 2001年3月

印刷 サツキ印刷株式会社

TEL 072-828-0171

